昨今の研究環境と若手研究者のキャリアパスの課題について

Issues on current research environment and career path of young researchers

東工大 科学技術創成研究院・元素戦略研究センター　**細野 秀雄**

Inst. Innov. Res, MCES, Tokyo Tech.,

Hideo Hosono

E-mail: hosono@msl.titech.ac.jp

研究室の他に幾つかの研究プロジェクトの総括責任者や JST さきがけの領域総括を務めてきた経験から標記の課題に関して講演を依頼された。以下に私見を述べ、議論に供したい。

A. 若手研究者の研究環境

国立大学や国研では独立法人化後に効率化係数の導入により毎年１-３%ずつ運営交付金が減少し、いわゆる「校費(運営交付金)」だけに頼っていては、若手に限らず実験系では本格的な研究の遂行が困難になりつつある。一方、科学研究費の若手研究や JST さきがけを筆頭に、民間の財団なども若手研究者に配慮しているので、競争的資金はそれなりに充実してきている。欧米でもさきがけスケールの若手用の大型研究費は多くはない。研究費だけでみると意欲と能力のある若手研究者にはいい時代が到来しているといえると思う。しかしながら、ここで問題となるのが若手研究者の自立環境である。さきがけ研究でのサイトビジットの主眼は、研究室主催者の理解を得ることだ。若手の獲得した研究費は自分のものと考えている上司も少なくない。また、若手が大きな研究費を得ると研究室の調和がとれないので転出してほしいという圧力が発生する場合もある。若手研究者は独立研究者（PI）して処遇し、かつチームとして国際的な成果を挙げられる運営が主催者に強く求められる。

組織横断型のプロジェクトでは、学内外の研究者が密に交わる機会なので、これに参画すると研究費のみならず、いろいろな領域や組織の文化に触れられるので、若手研究者には積極的に参画を薦めたい。また、研究テーマのマップをみると、日本はバイオ、ナノ、IT という先進国共通の 3 大テーマに集中しており、新しい芽が殆ど生まれていない状況だ。若手が新しい芽を創る挑戦的テーマに取り組むことを政策的にもっと強力に推進する必要がある。これには評価を IF のような安易な指標ではなく、人間力も測るような柔軟な対応が不可欠。シニアやファウンダーの責任である。

B．キャリアパス

課題が山積している。思いつくまま列挙する。１）本当に博士に相応しい学生が進学しているか？　研究者は甘い職業ではない。２）理系博士を積極的に採用する企業は増えているが、研究者の顔が外から殆ど見えない。これでは企業研究者のロールモデルが若手には分からない。３）学部、修士、博士を同一の研究室で過ごす学生が多すぎる。これは日本固有の蛸壺構造ではないか。学生と教員の持たれ合いの構図になっている。４）博士課程の学生の授業料と生活費を民間との共同研究費に計上すべきである。博士学生に指導教員のファンドから支援することを制度的に行っていない国は殆どない。

© 2018年 応用物理学会